

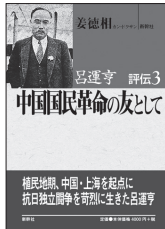
姜徳相著

『呂運亨評伝3

——中国国民革命の友として』

『呂運亨評伝4

——日帝末期暗黒時代の灯として』



評者：長田 彰文

過去から現在にかけての在日韓国・朝鮮人研究者中、朝鮮近現代史研究の代表的な一人である著者は過去、日本の錦絵や三・一運動に代表される独立運動、関東大震災、学徒動員などと朝鮮（人）との関係史について、著作を世に問い続けてきた。そして、近年において研究を積み重ねてきたのが、朝鮮人独立運動家・呂運亨についてであり、本書評での二冊は、同じ新幹社から一〇年以上前に出た『呂運亨評伝1——朝鮮三・一独立運動』（二〇〇二年）の第一章から第八章までおよび『呂運亨評伝2——上海臨時政府』（二〇〇五年）の第九章から第十六章までの続編に相当する。二冊は、前者が続く第十七章から第二十二章まで、後者が第二十三章から第二十六章までおよびあとがきとなっているが、まずは、各章の内容を概略する。

第十七章「『韓中互助社』の結成とその活動」においては、一九一九年四月発足の大韓民国臨時政府は、日本統治下にある朝鮮、日清戦争での敗戦およびその後の欧州列強の「中国分割」で半植民地状態にある中国が反帝国主義という

共通点があったため、同年の五・四運動および日本軍の間島侵攻後に中国の政界、実業界、知識人および民衆などと上海亡命朝鮮人間で韓中連帯の機運が出たこと、両者間で一九二〇年一〇月にできた韓中親友会が同年末までに中韓互助社と改名し、中国語版『独立新聞』発行などの広報活動、各種大会の開催などを行なったが、朝鮮人側で交際科主任に選ばれた呂運亨は、対外的に代表とみられていたこと、上海互助社の朝鮮人側主要メンバーは、呂運亨主導で設立されていた新韓青年党員などがほとんどであったこと、その後の一九二一年には漢口長沙互助社、さらに呂運亨が盟友関係にあった孫文の根拠地であった広東にも互助社ができ、同年十一月開催のワシントン会議で中国山東省問題および二一か条、朝鮮独立を訴えることを主張したが、会議では朝鮮問題はまったく取りあげられず、それが中韓協会の設立および孫文と臨時政府国務総理兼外務総長申圭植の会見につながったことなどが記されている。

第十八章「臨時政府周辺の軍事路線」においては、呂運亨は労兵会の組織づくりにも乗り出し、労兵会は、軍人養成の会則、会憲をもったが、臨時政府が国民の兵役義務を規定したのに拠ったこと、設けられた武官学校は校舎も訓練施設もなかったため、呂運亨や安昌浩が中国広東政府に働きかけた結果、雲南や貴州などの講武堂に朝鮮人青年が入れたこと、労兵会理事長には金九が就き、彼と呂運亨間には臨時政府への姿勢での微妙な違い、金九の武と呂運亨の文との対照性があったが、自主的軍事路線の長期的確立という根本があったため、両者は協力したこと、日本に寝返った金徳炯の陳述によれば、労兵会による軍人養成は、臨時政府、韓中互助社とも相互にからまる組織的な中国広東政府との合作であったこと、それでも中国におい

て呉佩孚率いる直隸派と張作霖率いる奉天派が対立し、第一次奉直戦争が一九二二年、起こったが、朝鮮独立軍は直隸派支持の創造派と奉天派支持の改造派が対立した一方、朝鮮総督府は、朝鮮防衛のため、奉天派を支持し、援助したことが記されている。

第十九章「レーニン死後、急展開するソ連外交」においては、第二次奉直戦争が一九二四年に起ころうとする中、前述の創造派と改造派間で妥協が模索され、そのための国民委員会が一九二四年二月にウラジオストクで開催されたが、コミンテルンが解散命令を出したことで、その背景に朝鮮問題に理解があったレーニンが同年一月、死亡し、ソ連政府はその後、日本との交渉に転じ、ロシアでの朝鮮独立運動を締め付けてきたこと、呂運亨は、日ソ交渉を担った駐中公使カラハンが朝鮮問題を理解していたことから、彼との接触を図ったこと、呂運亨は一九二三年一二月、カラハンとの北京会談に臨み、援助を要請したが、独立党派再統一を求められ、独立党派結成に向けて各方面に働きかけたこと、呂運亨が上海に帰着した一九二四年、彼の主導で議政院会議が再稼働し、民族陣営の統一派は発言力を強めたが、日ソ交渉の結果、一九二五年一月の日ソ基本条約調印につながり、活路を中国革命に見出したこと、その過程で李承晩が同年三月、臨時政府の臨時大統領を弾劾されたことが記されている。

第二十章「中国国民革命の友として」においては、呂運亨は中国革命と朝鮮独立が共通のものとの認識下、中国共産党の創党や孫文の連ソ容共などをうけて、孫文やマーリン、ヨッフエなどと会談して、中ソ連携を推進したこと、また陳独秀や瞿秋白などに働きかけ国共合作においても一役買ったこと、しかし呂運亨は

一九二五年三月の孫文の死後、日ソ基本条約の規定が朝鮮独立運動の締め付けにつながるものであり、ボロディン夫人やカラハンとの会談でも対立は解消されなかったため、朝鮮独立運動が主導権を行使できる領域・機会を中国革命に求めたことが記されている。

第二十一章「中国五・三〇運動から朝鮮六・一〇運動へ」においては、上海では高麗共産党を名乗る上海派とイルクーツク派があり、呂運亨は後者に属したが、コミンテルンの後援もあって、両者の統合に尽力したこと、そのような中で一九二五年、上海で警察がデモ隊に発砲して、労働者や学生を殺害した事件を契機に排日、排英を主張する広範な民族運動になった五・三〇運動が起こったが、呂運亨は、発砲を主導した英国主敵論を主張し、日英帝国主義の分断を図った一方、中国側、特に中国共産党の瞿秋白との連帯関係を強化したこと、一九二六年四月に死去した「韓国最後の皇帝」純宗の国葬が六月一〇日に決まり、朝鮮総督府が三・一運動の再現を防ごうとする中、独立運動家や学生、民衆などにより六・一〇運動が起こり、当局の事前の警戒態勢のため、散発的運動に終わったが、呂運亨は、運動を主導したこと、運動の発生をうけ、中国国民党や共産党、中国人労働者などは、連帯や支持の意を表し、「五・三〇」と「六・一〇」間で連続性があったことが記されている。

第二十二章「北伐戦争と反革命の嵐の中で」においては、五・三〇運動をうけて、中国国民党宣伝部の陳春圃主催で一九二五年七月、広東で開催された東方被圧迫民族連合会に呂運亨は参加し、上海で亜州協会を設立したこと、しかし弾劾された李承晩派の七人組が同年一二月、「親日」を理由に呂運亨宅を襲撃・殴打するテ

口事件を起こし、入院したこと、それでも呂運亨は翌年一月に広東で開催された中国国民党第二次代表大会に出席し、汪精衛など左派と蒋介石など軍人が指導権を確立した大会において、中国革命の必要性を訴えたあと、中国共産党の歓迎会にも出て、中朝の互助・共存の上に共産主義が実現可能との演説をしたこと、呂運亨は広東で蒋介石などとの会見後、相互援助協定を締結し、黄埔軍官学校で多くの朝鮮人青年が学べるようになったこと、蒋介石が一九二六年七月に北伐による中国統一を宣言後、北伐軍を進めたが、それに朝鮮人青年が少なからず参加した一方、呂運亨は国民党左派・共産党連合と国民党右派が対立する中、前者に属したこと、しかし後者に属する蒋介石は北伐を進めつつも第一次国共合作が破局する中、反共粛清に乗り出し、朝鮮人もまきこまれたため、呂運亨が望んだ中国革命を通じた朝鮮独立も遠ざかったこと、呂運亨は巻返しのため、中国各地を周ってさまざまな行動をとったが、一九二九年七月、上海で日本警察に逮捕され、朝鮮に護送されたことなどが記されている。

第二十三章「朝鮮中央日報社長として」においては、呂運亨は朝鮮への護送後、尋問、裁判の結果、懲役三年に処されて、一九三二年七月に大田刑務所を仮出獄したこと、彼は非妥協、しかし民族内部の対立先鋭化には反対との立場下、請われて『朝鮮中央日報』社長に就いたが、圧力の中で言論活動を展開する一方、各種イベントの主催、当局が干渉しにくく、民族精神高揚にもつながるスポーツ振興に尽力したこと、また彼は数多くの講演会および各種新聞・雑誌に寄稿し、民衆に直接、語りかける一方、三〇〇組もの結婚式主礼を務めることによって民衆との接点をもったこと、そのような中で一九三六年八月のベルリン五輪で「日本選手」

孫基禎が優勝、南昇龍が三位に入り、二人は日章旗の掲揚、君が代の演奏の中、消沈しつつ表彰されたが、孫基禎の胸の部分の日章旗を抹消した写真を『東亜日報』および『朝鮮中央日報』が掲載したこと、朝鮮総督府は、この「日章旗抹消事件」をうけて『朝鮮中央日報』に圧力を加え、呂運亨が恭順による続刊ではなく廃刊を選んだため、発行権が取り消されたことなどが記されている。

第二十四章「皇民化・内鮮一体化政策に抗して」においては、呂運亨は前記の「事件」以降、新朝鮮総督南次郎による統治の締付け強化の中で「特要甲」の思想保護観察の対象とされたこと、朝鮮総督府は、時局の緊迫化に対応するため、韓相龍、崔麟、さらに李光洙などの「名士」に圧力をかけ、「親日派」に転向させたこと、さらに朝鮮総督府は、「内鮮一体」をめざして、神社参拝、創氏改名、日本語常用などの「皇民化政策」を展開し、非転向者のさらなる包摂にのりだしたが、呂運亨は、断固として応じなかったこと、そのことで「親日派」とのあいだで亀裂が生じたが、それは一九四五年以降の解放政局にも大きな影響を与えたこと、「皇民化政策」がその強度を増す中、呂運亨は、日本の必敗を確信して、動いたこと、そして、呂運亨は朝鮮の「暗黒時代」下、地下にも潜らず、刑務所にも行かず、朝鮮外にも行かず、朝鮮内で朝鮮民衆とともに苦難をともした唯一の指導者であったことなどが記されている。

第二十五章「日本政界との接近戦を展開して」においては、日本が日中戦争の泥沼に入った中、そこからの脱出のために傀儡の汪精衛政権擁立の一方で国民政府との和平工作に着手したが、その中で中国要人と関係をもつ呂運亨に着目したこと、日本側からは右翼思想家の一方

で「アジア連盟」を構想してもいた大川周明が一九四〇年から一九四二年、来日した呂運亨とたびたび接触して、両者は、同床異夢ながらも「断金の友」となったこと、呂運亨は求めに応じて近衛文磨首相や田中隆吉とも会見したこと、これらの「接近戦」は、日本支配層に意識的くさびをうつ高度な政治的行動であったが、臨時政府要人は「投敵誘導」工作と誤解し、解放後にはナショナリストの結集に否定的影響を与え、親日派や李承晩などの南北分断勢力の専横を許す結果になったことなどが記されている。

第二十六章「建国同盟結成の諸様相」においては、日本は一九四一年一二月の日米開戦後、戦局を有利に展開したが、大川や田中、近衛などは有利な状況下で中国国民政府との和平をなすべく、呂運亨に仲介を働きかけたものの、それを嫌った東条英機首相は翌年一二月、来日中の呂運亨を逮捕させたこと、ソウルに護送された呂運亨は拷問もふくめた厳しい尋問の結果、一九四三年に擬装の「転向文」に署名したが、朝鮮総督府は、それにとどまらずあらゆる手段を用いて呂運亨に親日行為をさせようとしたこと、やがて戦局が日本にとって劣勢になる中、小磯国昭朝鮮総督などは、呂運亨を保護観察しつつも朝鮮人のいっそうの戦争協力に向けて、また対中平和工作のためにも使おうとした一方、呂運亨は、逮捕前に六度訪問した日本で同胞青年と会い、日本必敗および建国準備を説いたこと、呂運亨は一九四三年、同志たちと朝鮮民族解放同盟を、翌年にはそれを発展させた建国同盟を密かに結成したこと、一九四五年になり、ポツダム宣言、米軍の原爆投下、ソ連の対日参戦などで日本の敗戦が目前となる中、朝鮮総督府は宣言受諾後の治安維持のため、政務総監遠藤柳作が八月、呂運亨と接触し、治安維持

や日本人の円滑な帰国の保障の一方で権力の移譲で合意したこと、それをうけて「光復」後直後に建国準備委員会（建準）を結成し、さまざまな人たちが集い、さらにそれは同年九月、朝鮮人民共和国となったこと、しかし親日派や右派勢力は、米軍政下の南朝鮮において呂運亨を中傷し続け、それもあって、呂運亨は一九四七年七月、暗殺されてしまったことなどが記されている。

以上をふまえて、二冊に対する評価を行ないたい。

まず、呂運亨の知己・交流の範囲の広さおよび深さを二冊において明らかにしたことを挙げたい。それは、孫文やレーニンといった中ソにおける「創業者的」指導者やその部下、後継者たち、朝鮮内における独立運動家たちのみならず、あらゆる分野・階層の人たちのみならず、自分を弾圧する日本の官憲、さらには近衛や大川、田中といった日本の政界や思想界、軍部などの指導層にまで及んでいた。特に、大川との接触、その交流の深化は、両者の立場や思想の違いから意外な印象を与えるが、著者が初めて明らかにした事実であり、その事実、朝鮮および日本が戦前・戦後に歩むかもしれない別の道の可能性を示唆している。また、広範な人脈があればからこそ、呂運亨が解放前・解放後、朝鮮内外で縦横無尽に活動することができた。

次に、呂運亨が一九二九年、逮捕・護送されてから、一九四五年の解放まで朝鮮に留まり続け、各種の活動を展開し、日本の敗戦を予期しつつ、建国同盟を設立したりして備えたが、その間の彼の苦悩、にもかかわらず決して希望を失わない様子が生き生きと描かれていることが挙げられる。第二十四章の一三八 - 一三九頁にあるように、朝鮮内で表に出て活動した呂運

亨は、地下に潜伏した朴憲永、中国重慶で国民政府と行動をとともにした金九はじめ臨時政府の人たち、米国で米国政府への働きかけに終始した李承晩、また記述はないが、中国東北部で日本軍に敗退して、ソ連領に逃れたあと、ソ連軍と行動をとともにした金日成が日本からの相対的自由を享受した上で行動できたのとは異なり、「皇民化政策」が強化される朝鮮で活動せざるをえず、それでも広範な活動を展開したさまが十二分に描かれている。

さらには、呂運亨が中国革命やロシアでの動きにも多大な影響を与えたことおよびその過程が明確に記されていることも挙げられる。これらは結局、中ソの「裏切り」により途中で頓挫してしまうが、日本による妨害工作によるものでもあり、朝中露による反帝国主義的提携がかなり進んでいたことが詳細に描かれている。

一方で、指摘したいことが若干ないわけではない。

まず、これだけの研究であるのに、『4』の最後のところに参考文献一覧がなかったことが挙げられる。それがあれば、後学者が史料を探す

のに便宜をもたらしたことであろう。

次に、解放から南朝鮮での米軍政下の呂運亨の動きが「尻切れトンボ」的に終わっていることが挙げられる。この時期は、現在にいたる朝鮮半島の南北分断に決定的影響を及ぼした時期であり、その時期に呂運亨が果たした役割が十分に描かれていないことは、「画竜点睛を欠く」といえないことはない。

ただ、それらは、いずれも大きなことではなく、本書のもつ価値をいささかも損なうものではないと判断する。

本書によって、呂運亨という人物が朝鮮近現代史において果たした役割、解放された朝鮮が彼によって実際とは別の道を歩む可能性があったことなどが人口に広く膾炙されることを願うばかりである。

(姜徳相著『呂運亨評伝3——中国国民革命の友として』新幹社、2018年11月、389頁、定価4,000円+税。『呂運亨評伝4——日帝末期暗黒時代の灯として』2019年6月、320頁、定価4,000円+税)

(ながた・あきふみ 上智大学文学部教授)